

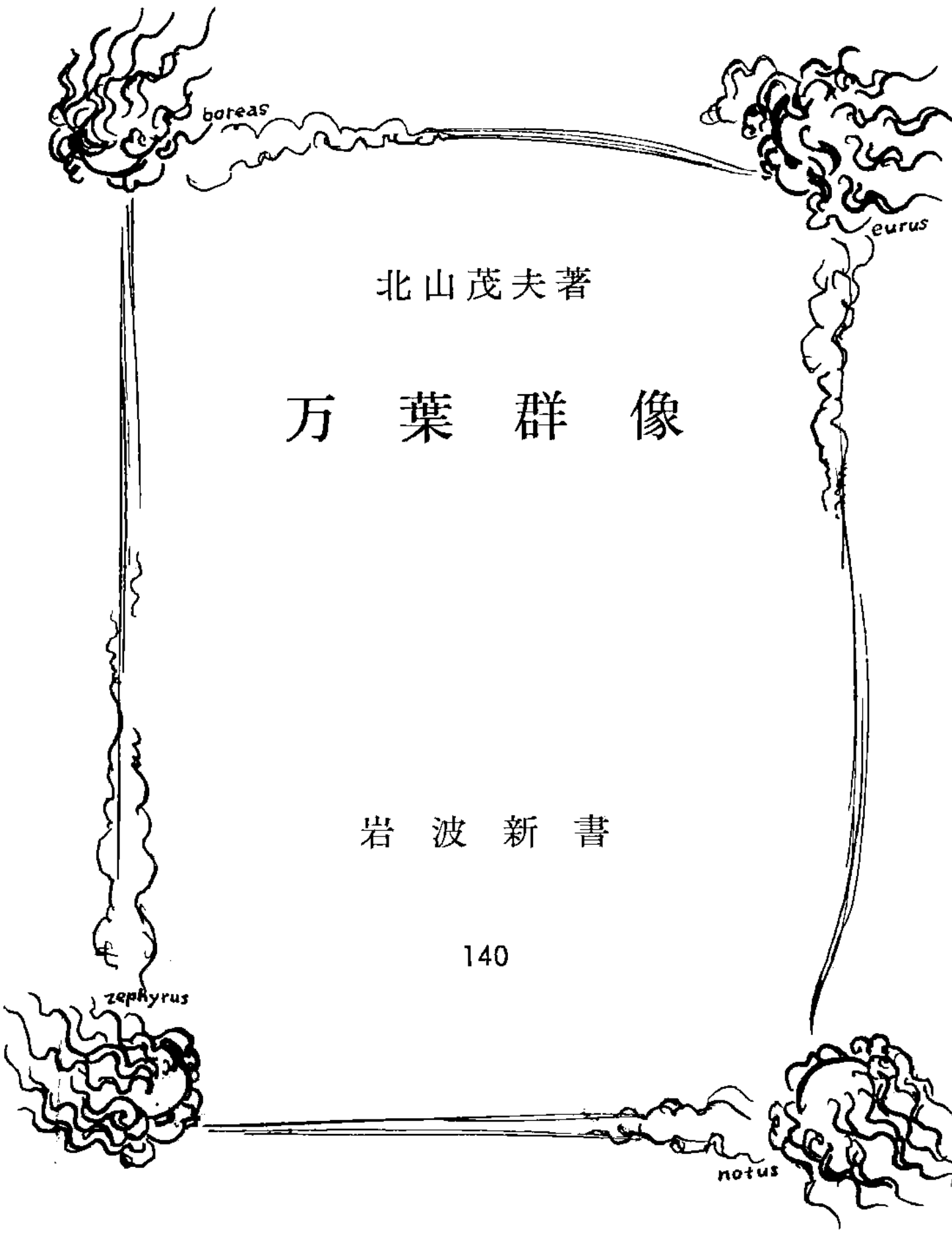
北山茂夫著

万葉群像



岩波新書

140



北山茂夫著

万葉群像

岩波新書

140

北山茂夫

1909年和歌山県に生まれる
1934年東京大学文学部国史学科卒業
専攻—日本古代史
著書—「大化の改新」「藤原道長」
「柿本人麻呂」「萬葉の時代」
「壬申の内乱」(以上岩波新書)
「日本古代政治史の研究」
「奈良朝の政治と民衆」
「萬葉の世紀」「続萬葉の世紀」
「平安京」
「王朝政治史論」「女帝と道鏡」
「大伴家持」「平将門」
「天武朝」「古代王朝の興亡」

万葉群像

岩波新書(黄版) 140

1980年12月22日 第1刷発行 ©

定価 380 円

著 者 きた やま しげ お
 北 山 茂 夫

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序章 『万葉集』とわたくし……………	一
Ⅰ 古代王朝の興隆のなかで……………	
第一章 近江宮廷の額田王……………	三
第二章 悲劇の青年大津皇子……………	三
第三章 白鳳の宮廷歌人柿本人麻呂……………	七
Ⅱ 平城遷都の前後……………	
第四章 叙景歌の山部赤人……………	六
第五章 病める老官人山上憶良……………	八
第六章 風流の名士大伴旅人……………	二四

目 次

III 天平時代の潮流	一五三
第七章 灼熱の恋 中臣宅守と茅上娘子	一五四
第八章 防人 若舎人部広足たち	一六九
第九章 万葉後期の典型大伴家持	一八五
注	二〇九
略年表	二二五
巻末の記	二二九

序章 『万葉集』とわたくし

わたくしは、ながらく古代政治史の研究に従ってきました。そして、多くの歳月を、八世紀史、すなわち奈良朝時代についてやしたといってもよいのです。

そういう事情から、『万葉集』に近づき、親しい関係をもつようになりました。もっとも、『万葉集』の歌にはじめてふれたのは、佐佐木信綱の『万葉集選釈』（一九一九年刊）によってでありました。その本でよんだ額田王^{ぬかたのおおきみ}の、

君待つと吾が恋ひをればわが屋戸^{やど}のすだれうごかし秋の風吹く 四八八

の一首がなぜか深く記憶にのこっております。うわべだけのことですが、その意味がすっかりわかったからでしょう。中学三年ころのことです。つづいて、父の書棚にあった島木赤彦の『歌道小見』（一九二四年刊）、『万葉集の鑑賞及び其批評』（一九二五年刊）をこっそりとりだして、ひろい読みしました。そして、その後者は、三高には買って買求めた記憶があります。わたくしが、何にひきつけられたのかは、いまとなってはしかとわかりません。

こういうことがありました。高校に入学したばかりのころ、英会話の時間は、ビアトリス・レーン女史（鈴木大拙夫人）というふとった米国人に担当されていました。女史は、新入生のわたくしたちに、五分間のスピーチを命じたのです。わたくしは、「万葉の恋（相聞）の歌について」という題で、英文の原稿を用意しました。相聞歌を知っているのだぞという誇らかな気持ちで壇上に立ったのをいまも覚えています。

この高校時代の一つの経験からいたしますと、わたくしは、その当時、万葉の相聞歌によく心をひかれていたことが回想されます。そして、それは、青年期としてはしごく当然のことでありましょう。第三学年では、教材として『万葉集』をつかいましたが、老教師の講釈はつまらないもので、かえって万葉にたいする興味をそがれたようです。

大学に進みまして、古代史を専攻するようになると、八世紀の政治に関心をもち、文学そして『万葉集』からもすっかり遠ざかりました。ときどき、沢瀉^{おもだか}久孝の『万葉集新釈』上巻（一九三一年刊）を読むくらいでした。時をへて卒業論文のテーマに、奈良時代の農民をえらんだものですから、史料を求めて、『万葉集』巻一四の東歌、巻二〇の防人歌のなかをさがしまわるといふ作業をつづけました。島木の本で、東歌については教えられていましたが、防人歌と関係させて読むのは、まったく我流でした。

学窓をでて、横浜生麦^{なまむぎ}の私立潤光女学校につとめていたころ、わたくしと同世代の評論家保田与重郎^{やすだ}が、さかんに柿本人麻呂、大津皇子、大伴家持について書きまくっていました。それは、一口にいえば、「皇国の道義」に立っての万葉論であります。アララギの歌人たちが、舶来の近代思想にとらわれて、万葉を曲解していると論難していました。

わたくしは、保田の主張にさまざまの疑問をいただき、反撥の感情をつのらせていました。⁽¹⁾

この左派から急角度に転向した人の主張に刺戟されて、わたくしは、はじめて本腰をいれて『万葉集』を研究することになりました。全二〇巻を通してノートをとり、感想を覚書にまとめたのは、それ以後のことであります。慶応義塾大学の『三田新聞』が「万葉の探求」特集号を出すにさいして、執筆を求められました。一九四二年の暮のことです。そして、満身の力をこめて書いたのが「万葉人の生活と文化」という小文です。⁽²⁾

戦後すぐに、万葉にかかわる問題から論文を書きはじめました。そして、ひとまず到達したところは、論文集『万葉の世紀』（一九五三年刊）であり、岩波新書の『万葉の時代』（一九五四年刊）ということになります。

すこし長い前置きになりましたが、わたくしは、もっぱら古典文学としての万葉を研究したわけではありません。そういう方面の研究書もずいぶん読んでいますが、省察の見地は、

歴史のなかの万葉にあります。別の言葉でいえば、万葉の作品を深く読むことによって、古代の貴族、地方豪族や農民の生活をよりよく把握しようとしたのです。そのころは、こういう方向に努力する人はごく稀でした。わたくしの場合は、むしろ一つの試みであります。

つぎの事柄にうつりましょう。最近のことですが、NHKがわたくしにラジオへの出講を依頼してきました。あたえられたテーマは、万葉の人物論ということでした。むしろ、歴史家の立場から、という注文がついています。限られた時間と回数ですから、六人にしぼることにいたしました。額田王、柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良、大伴家持、そして東国の防人たちです（この本では、ほかに、大津皇子、大伴旅人、中臣宅守・茅上娘子やかもり ちがみのおとめを加えました）。

ここには、古来定評のある人物をあげましたので、万葉を代表する作者がかなりに出揃っているでしょう。しかし、いうまでもなく、まだほかにも撰出せねばならぬ人がたくさんいます。それについては、ここにえらびだした作者たちに関係させて、なるだけ多く登場させたいとおもいます。

つぎに、とりあげる作品も、それぞれの歌人の代表作、またとくに、わたくしの好みによってえらびたいとおもいます。これもまたごく限られたものになるほかありません。あとは、皆さん自身で、じかに『万葉集』に親しんで味読していただきたい。わたくしは、ここで、

全巻に眼を通して万葉のあらゆる部分にふれられることを希望いたします。そして、皆さんが、万葉一〇人のリストをつくられ、作品をえらばれてはどうでしょうか。『万葉集』は、すぐれた古典として、万人のものであります。

万葉人物論にはいるまえに、二、三の重要な歴史の問題について、かいつまんでのべておきたいとおもいます。

まず、万葉の歌がつくられた年代はいつからいつまででありましょうか。これについてはいろいろの意見がでていますが、⁽³⁾まだ定説はないようです。

わたくしは、それを七世紀の後半から八世紀の中程すぎまでのほぼ一世紀と考えています。だから、その期間を、わたくしは、万葉の世紀というふうに呼んだこともあります。

その一〇〇年あまりの時期は、歴史全体、とくに政治史としては、たいへん大きな特色を現わしています。動きの激しい時代でありました。古代においては、創造性ゆたかな歴史年代といってもよいでしょう。

六四五年にはじまる大化の改新。大陸に唐が勃興して、その勢いが、朝鮮半島をもつつみこもうとする危機に、わが国では、なかのおおえ中大兄皇子を盟主とした中臣かまたり(のち藤原)鎌足ら少数のグループが決然として断行した国制の改革であります。その内容は広大深刻でありましたが、本

質的には、社会革命ではありません。

その改革の企ては、急激なかたちをとりましたが、いっきょに成就したものではありません。八世紀の初頭にいたるまで、その達成にはほぼ半世紀を要したのです。そのあいだに、朝鮮半島への大出兵そして敗戦、また壬申じんしんの内乱といった重大な事件をひきおこしました。都も難波京から飛鳥の地、そして畿外の近江国へと移り、一転して飛鳥に復帰し、浄御原宮きよみはらを中心とした京、さらに藤原宮へと移ってゆきます。そして、藤原宮において、この改新の運動は頂点に達したのです。

わたくしは、壬申の内乱（六七二年）の前後から、藤原宮の末年（七一〇年）までを、万葉の時代の前期と考えています。わが古代国家が、律令制を根幹にして、上向きのカーブをえがく活気ある時期でありました。わたくしは、その前期に現われた作者たちのなかから、額田王、大津皇子と柿本人麻呂をえらんで、主題の一部にしました。斉明女帝、その子の天智（中大兄）・天武（大海人）（おおあま）両天皇、また天武の皇后讚良皇女（持統）は、それぞれに、なかなかすぐれた作者たちです。額田王のかわりに、この四人から一人をえらんでもよかったのです。しかし、これらの人々の本領は、宮廷政治家たるところにあって、歌作は、いわば余技にすぎません。しかし、額田王の存在は、第一義的に歌の作者として考えねばならないでしょう。そ

の点については、次の章でややくわしくのべることにいたします。

ところで、古代国家の内部に、いくらか変調が見えるのが、文武天皇の慶雲期（七〇四―七〇七）ですが、その傾向が下向線を示してくるのは、元明・元正女帝の時代であります。年号で申しますと、和銅・養老の時期（七〇八―七二三）です。その体制を下部から壊してゆこうとする地方豪族、上層農民の力と中央政府の抑制方針がぶつかります。女帝たちは、何とかして、天武・持統の盛世にかえしたいとおもって努力します。『古事記』や『日本書紀』がうにできあがったのも、それにかかわっておりましよう。そのころ、政界を指導していた、鎌足の後継者不比等（ふひと）は、少しは地方民に妥協しても、体制の根幹はしっかり維持したいと考えて、新しい対応策をうちだしてゆきました。二女帝の時代は、新・旧勢力が激しく対立する様相を呈していました。

わたくしは、この特徴的な一時期に登場して、歌作を示した官人として、山部赤人、山上憶良、そして大伴旅人をあげたいとおもいます。

さらに、話をすすめましよう。左大臣長屋王の横死（七二九年）をへて、七三八年前後になりますと、奈良朝時代は、あいつぐ内乱・クーデタの時代に突入してゆきます。そのころには、旅人、憶良、そして赤人は、つぎつぎに死に、また『万葉集』の世界から姿を消してゆきま

す。つまり、和銅・養老年代とその前後を、前期からの過渡期として、後期へと移ってゆくのです。

その後期を代表するのが旅人の子、家持であります。かれは、どちらかといえば、保守派に属します。後期の政情、また内乱については、家持の章で具体的にのべることにいたしますしょう。

これまで話してきましたように、わたくしは、万葉の時代を、前期、過渡期（中期）といってもよいでしょう、そして後期というふうに三区区分して、それぞれの作家と作品を考えることにしています。

万葉人物論の前提として、ほかにすこし問題にしておかねばならぬことがあります。ごく簡単にふれておきます。

大化の政治改革の過程に、新しい人間のタイプ、すなわち政治的人間を生みだしました。官人であります。国家の役人です。人麻呂、赤人、憶良、旅人らはすべて官人であります。

さらに申しますと、万葉の歌人たちは、いちじるしい例外、たとえば、東国農民、防人^{さきもり}たちをのぞいたほかは、ほとんど王族、官人であります。女性たちも、大多数は、そうした上級の家のものです。

この歴史時代の官人は、みずからを「大夫」^{ますらを}とよんでいました。その意識の底には、地方民に対する優越の感情が流れていました（農民は、「あらしを」といっても、けっして「ますらを」とはいわなかったのです）。

人麻呂の歌にも、おのれを「ますらを」と称した例がありますが、かれのほかの作に、

あらたへの藤江の浦に鱸釣^{すずきつ}る白水郎^{あま}とか見らむ旅行くわれを 二五二

というのがありますが、このときの人麻呂の感情のなかに、漁夫に対する優越感がはっきりみとめられます。わたくしのいう、「ますらを」の意識、あるいはその自負であります。

つぎの問題は、恋愛、ついで結婚の様子であります。一般的にいいますと、この時代には、男は夜ごとに恋する女のもとに通いました。そしてそのまま、女の家で、かれらの結婚生活がはじまりました。これを、夫婦別居の習俗といいます。二人のあいだに子どもができて、この妻問い婚をつづけました。男の訪れがとだえると、夫婦の関係はこわれます。女はあくまでも待つ立場であります。夫婦が別居しているものですから、かれらの愛情はいつも新鮮です。男は、女のもとに、ほかの男が言い寄るのではないかという不安につき動かされていきます。

この結婚形態については、官人、貴族もかわりはありません。やはり女のもとに男が通っ

たのです。

『万葉集』には、相聞そうもんという種類の歌群がたいへん多いのですが、これは、恋人または夫婦のあいだの愛の歌であります。巻一一・一二などは、「古今の相聞往来の歌の類の上・下」といわれ、恋の歌ばかりを集めております。ほかの巻にも、相聞歌が非常に多いのです。わたくしたちは、その発生の特殊な歴史事情として、妻問い婚、夫婦別居という一般的な習俗を考えねばならないでしょう。

以上の概括的な説明をもって、万葉人物論への導入を終わりたいとおもいます。

I

古代王朝の興隆のなかで

第一章 近江宮廷の額田王

額田王は、すぐれた歌をいくつかのこしただけではなく、大海人（天武）との恋、またのちに天智天皇との関係からもうたいへん有名な女人であります。そのために、現代の通俗作家の小説のヒロインにもなっています。それがテレビのドラマとなり、いつのまにかその影響をうけて、彼女の歌からではなく、現代の興味本位の読物やドラマによって、人々は、額田王のイメージを胸にえがきがちになっています。わたくしは、それらを見て、ずいぶんためだとおもうのですが、いかに史料をあさっても、彼女の伝記史料がすくなく、断片的です。そこに、放恣きわまるフィクションがはいりこむすきがあるのです。

『日本書紀』（これからは『書紀』という略称を使います）の記載によりますと、彼女は、鏡王という人の娘であります。それならば、鏡王はどういう人なのか、その祖先は何天皇であるのか、それらの点についてまったく不明です。また、『万葉集』によりますと、額田王にはすくなくとも一人の姉がいました。ここでわたくしたちは、額田王は王族に属することを確認し